

## 論文「自然災害と精神疾患」\* について思う

中根允文

Yoshibumi Nakane

## はじめに

シリーズ「精神医学の潮流」の中の1編として選ばれたことを、まず心から感謝したい。改めて論文を見直したとき、未だ20数年しか経っていないというのに、共著者7名の内すでに高橋良・富永泰規・内野淳の3氏が故人になっていることに驚いた。それだけの時間が経過してしまったといえそうなのであるが、このプロセスの中でわれわれの研究は更に発展させ得たと思いつき返すことができたのも事実である。

われわれは、こうした研究を「社会精神医学」あるいは「疫学精神医学」分野のもと位置づけてきた。同領域は重視されながらも、time consumingであるとか多大なhuman resourceが必要であるといったことから、必ずしも安易には発展させることができないのも現実である。著者は、北欧留学から帰国後、われわれの研究室に疫学精神医学研究グループを立ち上げ、この論文発表などをきっかけに、地域調査研究のデータを着実に蓄積するとともに、被災者支援のあり方を繰り返し提案していった。こうした研究の開始当初は確かに何を調査し、それを如何に地域住民にフィードバックするかの方向性が確認しがたいものであったが、知見を確立するに伴って被災者中心の問題への積極的関与が可能になってきたと考える。

## 災害と精神医学

災害精神医学 (disaster psychiatry) という用語は、今や突飛な印象を抱かせるものではなくなっている。自然災害あるいは人為的災害が余りに多発するようになったためか、それらによる被害が広汎かつ甚大になった所為なのか、単に物理的な被害や被災に伴う話題に止まらず、事件や事故が発生すると殆どのとき直ちにトラウマとか心のケアといったことが声高に叫ばれる。

著者が居住する長崎は、表1に示すように、本来は長崎に限ったことでないのかも知れないが、何故かたびたび災害に見舞われたという記録がある。もちろん、その最たるものは昭和20(1945)年8月9日午前11時2分に起こった原子爆弾投下というジェノサイドに伴う甚大な心理社会的影響である。その後も、たびたび台風や洪水に見舞われ、島原雲仙の普賢岳噴火災害などによる被災がある。また、メディアで話題になった男児誘拐殺害事件(2003年7月)・小6女児同級生殺人事件(2004年6月)などの重大事件もあり、そこに関係した少年たちにおける心理的ケアサポートも訴えられた。しかし、それらの全てにわれわれが調査研究を計画したわけではなく、以下に記すように、幾つかの理由からそのほんの僅かであった。

## 災害被災に係る調査について

表記論文における災害は、市民約300人が洪水

\*文献7) (本論文・参考文献とも学会会員ホームページに掲載します)

著者所属：長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科

表1 長崎における重大な災害

被災時期	主たる被災地域	人的被害	建物被害	道路の損壊
		死者/行方不明/負傷	全壊(全焼)/半壊(半焼)	
1945.08.09	長崎(原爆被爆)	73,884/1,924/74,909	ca 14,000/5,500	不明
1957.07.24~27	諫早(水害)	705/77/3,735	799/2,656	1,551
1959.09.16~17	平戸(水害)	15/25/184	754/1,108	403
1962.09.26	福江(火災)	0/0/28	797/14	不明
1967.07.08~09	佐世保(水害)	44/6/144	258/456	353
1982.07.23~24	長崎(水害)	294/7/805	584/954	4,969
1990.11.17~95.02	島原(火山災害)	41/3/12	全 2511	不明
1991.09.27	佐世保(水害)	5/0/257	158/2,453	159

(長崎地盤研究会/九州橋梁・構造工学研究会編：長崎県の災害史。出島文庫，2005 から)

等で直接に死去し、2週間以上に亘って日常生活が大きく障害されたために、一般市民の混乱ぶりがテレビ・ラジオや新聞などマス・メディアだけでなくドキュメンタリータッチの出版物(例えば、河口栄二：「濁流——雨に消えた299人——」，講談社，1985年3月刊行)を通じて紹介され、更に地元以外の大学研究室(新聞研究室・工学部など)から様々な心理的影響に関する研究の成果が予想以上に発表されたものである。

日常的に診療しているわれわれの現場においても、多くの精神疾患患者が一般市民と同様に或いはそれ以上に大きく混乱している状況に遭遇した。各疾患毎に、被災の心理面に対する影響の大きさが微妙に違うことも感じ始めていた。幾つかの先行研究において、関連の知見があることはおおよそ把握できていたが、日本国内でより厳密に評価しようとして行ったのが、本論文である。結果からすると、おぼろげながら印象となっていたことがエヴィデンスとして実証できたわけであり、こうした調査の試みの体験と結果は、その後のわれわれに勇気を与えるものであった。

災害等の被災者に何らかの心理的負担が生じることは古くから十分に想定されており、諸外国だけでなく、国内にあっても幾つかの報告は知られていた。特に海外諸国では「災害文化」の派生も知られており、類似の被災を繰り返し蒙る中、それらに対する物理的・心理的被災の影響を抑制・防止する文化が育まれることが報告されてきた。

しかし、日本については、台風や水害あるいは地震などに繰り返し見舞われていても、被害を最小化させる文化が未だ生まれてきていないようである。その背景には文化的・心理社会的な差異があるのかも知れないが、今後詳しく検討されるべきであろう。とはいいいながらも、わが国で、必ずしも体系的で綿密且つ継続的な調査研究が十分になされてきてはいない。その理由は、疫学研究の全体を通じても言われることであるが、方法論の確立が遅れているということに尽きる。例えば、対象者となる被災者(あるいは被害者)個人や集団の同定が容易でない。災害が発生してまもなくの急性期とか亜急性期であれば、慢性期に入ってからより、彼らの把握はまだ容易であるかもしれないが、それでも一次的・直接的な被災者の周辺に、更に多数の関係者が二次被災者ないし間接的な被災者として存在するはずである。被災者の選択基準は、その後の調査結果に大きく反映することになり、特にのちに補償や様々な支援の対象になるか否かといった問題が生じる場合は慎重にならざるを得ない。

調査対象が決まった後には、被災者における心理的負担の評価法という問題がある。ふつう被災者に対して比較対照群を設定するのは容易でなく、問題にする関係症状が被災に特異的であるか否かを表明したとき、研究者はしばしば否定的な見解に曝される。そうした話題を軽減させる目的から、近年は様々な評価尺度が活用されるようになった。

表2 災害精神医療（治療）と災害精神保健（援助）における被災者支援の在り方

	医 療	保 健
対 象	精神疾患の治療中断, 急性精神疾患の発症	前臨床段階の精神疾患, 適応障害
時 期	多くは災害直後が重要	災害後長期にわたる
担い手	精神科医, 保健師, 看護師, 臨床心理士, 一般医	CW, PSW, 一般医, 臨床心理士, 精神科医
戦 略	専門的治療（個人レベル）	包括的援助（集団レベル）
期 間	短期（数ヶ月）	長期（数年）
受容度	高い	低い
実行度	易	難

(荒木憲一ほか：精神経誌, 98 ; 757-760, 1996)

例えば、まず出来事そのものを評価する Event Check List があり、心身の全般的な健康状態を評価するための全般健康調査の尺度 (General Health Questionnaire ; GHQ), そしてストレスフルな出来事に伴う PTSD 症状などであるか否かを評価するための「出来事インパクト尺度」改定版 (Impact of Event Scale-Revised ; IES-R) などが準備されている。これらのどれを或いは併せて採用するかは検討すべき課題であるが、顕著なショックを担った被災者の協力を得るには相応の配慮が必要である。もし、平常な状態（いわゆる健康診断みたいなもの）の GHQ スコアなどがあって対比できると、通常的でないときの有用な情報になるであろう。

次に、災害精神医学研究で配慮しなければならないのは調査時期である。混乱のさなかには、とうてい被災者に対する調査票への記入を依頼するなどということは考えられないし、だからといって時間をおいての調査であれば生々しい結果は把握できないであろう。

こうした調査研究を行おうとする時の基本的姿勢は、被災者に対する支援方策の指針を得るためのエヴィデンス確立を目的とすることであろう。被災者支援の視点のない調査研究はなされるべきでない。著者らは、これまで調査研究を繰り返す中、常に上記視点を堅持してきたつもりであるが、それでもなお方法論に対してだけでなく、基本的

視点にまでも批判的見解を公言されて驚いたことがある。

### その後の研究経過

長崎水害をきっかけに、雲仙普賢岳噴火災害の被災者支援研究、長崎原爆被爆者・被爆体験者に係る精神保健研究を長期的・継続的に、地域調査として行ってきた。こうした成果をふまえて（表2参照）、阪神淡路大震災においては避難所生活を強いられている住民の精神保健的救護に支援活動を継続させたこともある。

災害それぞれの被災者におけるメンタルヘルスケアの調査研究の結果報告の論文の幾つかは、参考文献として最後に列挙した。こうした研究論文をまとめるに当たっては、被災者の方々の絶大な協力に支えられてきた。このことに心からの感謝の意を表したい。

### 文 献

#### 1. 総説的論文および著書

- 1) 中根允文, 廣井 脩, 堤 邦彦ほか: 災害精神医学(座談会)。日本社会精神医学雑誌, 4 ; 1-10, 1995
- 2) 中根允文, 大塚俊弘訳: 災害のもたらす心理社会的影響——予防と危機管理。創造出版, 東京, 1995
- 3) 太田保之, 中根允文ほか編: 災害ストレスと心のケア。医歯薬出版, 東京, 1996
- 4) 中根允文: 自然災害と PTSD。臨床精神医学, 31 (増刊号); 125-130, 2002

5) 中根允文: 災害被災者支援の社会精神医学. 日本社会精神医学会雑誌, 14; 317-320, 2006

## 2. 長崎水害

6) 荒木憲一, 太田保之, 中根允文ほか: 災害に対する反応からみた単極型うつ病と双極型うつ病の異種性について. 社会精神医学, 7; 108-113, 1984

7) 荒木憲一, 高橋 良, 中根允文ほか: 自然災害と精神疾患—長崎水害(1982)の精神医学的研究. 精神経誌, 87; 285-302, 1985

8) Nakane, Y., Tominaga, Y., Araki, K., et al.: Epidemiologic investigations concerning functional psychoses in Nagasaki city—influences of the Nagasaki Flood Disaster on mental disorders. Genetic Aspects of Human Behavior (ed. by Sakai, T., Tsuboi, T.). Igaku-Shoin, Tokyo, p. 41-53, 1985

## 3. 雲仙普賢岳噴火災害

9) 太田保之, 荒木憲一, 川崎ナヲミほか: 雲仙・普賢岳噴火災害による避難住民の精神医学的問題に関する研究—General Health Questionnaire (GHQ-30) の因子分析より—. 日本社会精神医学会, 3; 109-129, 1995

10) 荒木憲一: 雲仙・普賢岳噴火災害による避難住民に対する精神保健活動—精神科医による危機介入—. 精神経誌, 97; 430-444, 1995

11) 荒木憲一, 太田保之, 川崎ナヲミほか: 避難住民への長期的な精神保健対策—雲仙・普賢岳噴火災害に対する支援活動の経験から—. 精神経誌, 97; 1124-1130, 1995

12) 中根允文, 相川勝代: 災害と子どもの精神保健—破局的ストレスとこころの問題. 児童青年精神医学とその近接領域, 36; 388-404, 1995

13) 荒木憲一, 太田保之, 川崎ナヲミほか: 災害精神医療(治療)と災害精神保健(援助)—援助のあり方について—. 精神経誌, 98; 757-760, 1996

14) 太田保之, 荒木憲一, 川崎ナヲミほか: 雲仙噴火災害避難住民の精神医学的問題に関する2年間追跡研究. 日本社会精神医学会雑誌, 6; 197-214, 1998

## 4. 長崎原爆被爆

15) Nakane, Y., Ohta, Y.: An example from the Japanese register; some longterm consequences of the Atomic bomb for its survivors in Nagasaki. Psychiatric Case Registers in Public Health—A Worldwide Inventory 1960-1985 (ed. by Horn, T., Giel, R., et al.). Elsevier, Amsterdam, p. 26-27, 1986

16) 三根真理子, 本田純久, 波多智子ほか: 高齢化する被爆者の精神衛生的側面. 長崎医学会雑誌, 69; 313-318, 1994

17) 中根允文, 畑田けい子, 本田純久ほか: 原爆被災の精神健康に及ぼす影響. 長崎医学会雑誌, 71; 161-171, 1996

18) Nakane, Y., Honda, S., Mine, M., et al.: The mental health of atomic bomb survivors. Nagasaki Symposium Radiation and Human Health; Proposal from Nagasaki (ed. by Nagasaki, S., Yamashita, S.), Elsevier, Amsterdam, p. 239-249, 1996

19) 中根允文, 朝長万左男, 三根真理子ほか: 50年前に原爆被爆した者における精神障害の有病率—地域調査のパイロット研究として—(研究代表者: 中根允文). 平成7年度文部省科学研究費補助金基礎研究B, 研究成果報告書, 1997

20) 中根允文, 今村芳博, 本田純久ほか: 原爆被爆者の精神的健康増進と大学. 長崎大学公開講座叢書11「地域創造と大学」. 長崎大学(大蔵省出版局), 東京, p. 201-208, 1999

21) 中根允文, 高田浩一, 園田裕香ほか: 被爆者健康ガイド「こころの健康」. 長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課, 長崎市, 1999

22) Imamura, Y., Nakane, Y., Ohta, Y., et al.: Lifetime prevalence of schizophrenia among individuals prenatally exposed to atomic bomb radiation in Nagasaki City. Acta Psychiatr Scand, 100, 344-349, 1999

23) 太田保之: 証言の心理的影響に関する分析結果, 原子爆弾被爆未指定地域証言報告書「聞いてください! 私たちの心のいたで」. 長崎市原爆被爆対策部調査課, 長崎, p. 87-95, 2000

24) Ohta, Y., Mine, M., Wakasugi M., et al.: Psychological effect of Nagasaki atomic bombing on survivors after half a century. Psychiatry Clin Neurosci, 54; 97-105, 2000

25) 中根允文: 被爆者に対する精神・心理学的アプローチとケア. 広島医学, 55; 133-137, 2002

26) Honda, S., Shibata, Y., Mine, M., et al.: Mental health conditions among atomic bomb survivors in Nagasaki. Psychiatry Clin Neurosci, 56; 575-583, 2002

27) 太田保之, 小澤寛樹, 朝長万左男ほか: 被爆体験者実態調査報告書. 被爆体験者実態調査委員会, 長崎, p. 1-38, 2004

28) 一ノ瀬仁志, 中根秀之, 木下裕久ほか: 長崎原爆被爆体験者の心身の健康に関する調査研究. 長崎医学会雑誌, 81(特集); 222-225, 2006

29) 中根允文: 人為災害, 長崎原爆被害者: 心理的障害認定の道のり. 精神医学, 48; 273-285, 2006